

「ナレッジマネジメント」と「ウイズダムマネジメント」の関係

1. 「ナレッジマネジメント」

→ ナレッジマネジメント を参照

個人の持つ知識や情報を組織全体で共有し、有効に活用することで業績を上げようという経営手法。日本語では「知識管理」などと訳され、「KM」と略されることもある。

この場合の知識・情報とは単なるデータである「形式知」だけではなく、経験則や仕事のノウハウといった、普段はあまり言語化されない「暗黙知」までを含んだ幅広いものを指す。

これからの企業経営の重要な要素となると言われており、米国を中心に、対応を急ぐ企業も増えつつある。

ナレッジマネジメントを浸透させることにより、個人の能力の育成や、組織全体の生産性の向上、意思決定スピードの向上、業務の改善や革新の場の提供が実現できるとされている。

ナレッジマネジメントとは単なるコンピュータシステムの名称ではなく、システムを利用して業務プロセス全体を改善することを指す。

すなわち、その導入には、個人の知識を組織の知識として活かす仕組みと、知識の共有・適用・学習により新たな知識を創造できるプロセス、そのプロセスを継続できる文化・環境・システムなどが必要とされる。

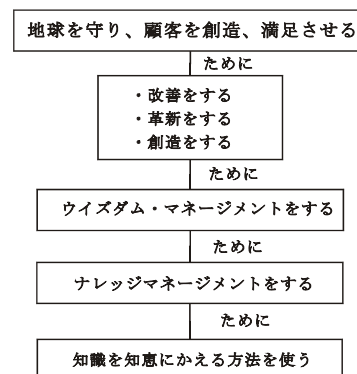
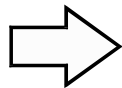
現在運用されている事例では、グループウェアなどの共有型文書管理ソフトを用いて、営業日報のように個人が日々蓄積していく文書を組織全体で共有し、事例や方法論についての議論の場を設けたり、過去の事例を検索できるようにすることによって実現している。

今後もこの概念を拡張する様々な技術やソフトウェアが登場すると予測され、具体的な形態は日々進歩していくものと思われる。

この方法の提唱者は、日本人の野中郁二郎博士であると言われている。

IT用語辞典 e-Words より引用

改善、革新、創造、
ウイズダムマネジメント、
ナレッジマネジメント、
知識を知恵にかえる方法
の関係



2. ウイズダムマネジメント (=ナレッジ・ツー・ウイズダム・マネジメント)

個人、集団または組織で、「何かをしようとするとき」に、「何をするために、何をどうして、どのような結果を得るた

めに、どうしたらよいかの知恵を知識から創りだす、知識を知恵にえる方法」を基本手法として使ってやる経営手法。日本語では「知恵管理」がそれに当たると思われる。「WM」と略されることもある。

この方法の創案者は江崎通彦氏で、内容はURL <http://dten-wisdom.jp> で、日本語、英文 (Method for changing Knowledge to Wisdom)でその内容は公開されてる。いまのところ、この方法は、世界でこの方法しかなく、39カ国以上からのアクセスがある。

この場合の知識(広い意味での情報を含む)は単なるインプットでありその中には、「形式知」、普段はあまり言語化されない「暗黙知」までを含んだ幅広いものである。これらを整理して使えるようにしていくのがナレッジマネジメントの方法であり、またそのウイズダムマネジメントに使えるように知識を整理しておくようにするのがナレッジマネジメントの役割といえよう。

また更に知恵の内容またその結果を人に説明できるようになると、その知恵は、新しい知識となる。

これからの企業経営の重要な経営方法となるものであり、日本を中心に、対応を急ぐ他国の企業も増えて来ると考えられる。

ウイズダムマネジメントを浸透させることにより、個人の能力の育成や、組織全体の経営の落ちのない手順づくりの能力が向上し、それによる効果効率向上、意思決定・判断スピードの向上、業務の改善や革新能力の実現の場が実現できる。

「ウイズダムマネジメントをする」ということとは、「ナレッジマネジメントを、ウイズダムマネジメントを重要な手段として利用して前例のないことを創出、実現することのほか、現状の業務プロセス全体を改善、革新をする」と指す。

すなわち、その導入には、個人の知識を組織の知識として活かす仕組みと、知識の共有・適用・学習により新たな知恵と知識を創造できるプロセス、そのプロセスを継続できる文化・環境・システムが必要とされ、その中心となる方法は「知識を知恵にかえる方法」となる。

今後も、そのウイズダムマネジメントを拡張するため、従来からと更に新しい管理技術、創造技法などの結合や、方法論、ソフトウェアが登場すると予測され、具体的な形態は日々進歩していく。